

発行日： 平成29年 7月18日

発行者： 今村証券株式会社

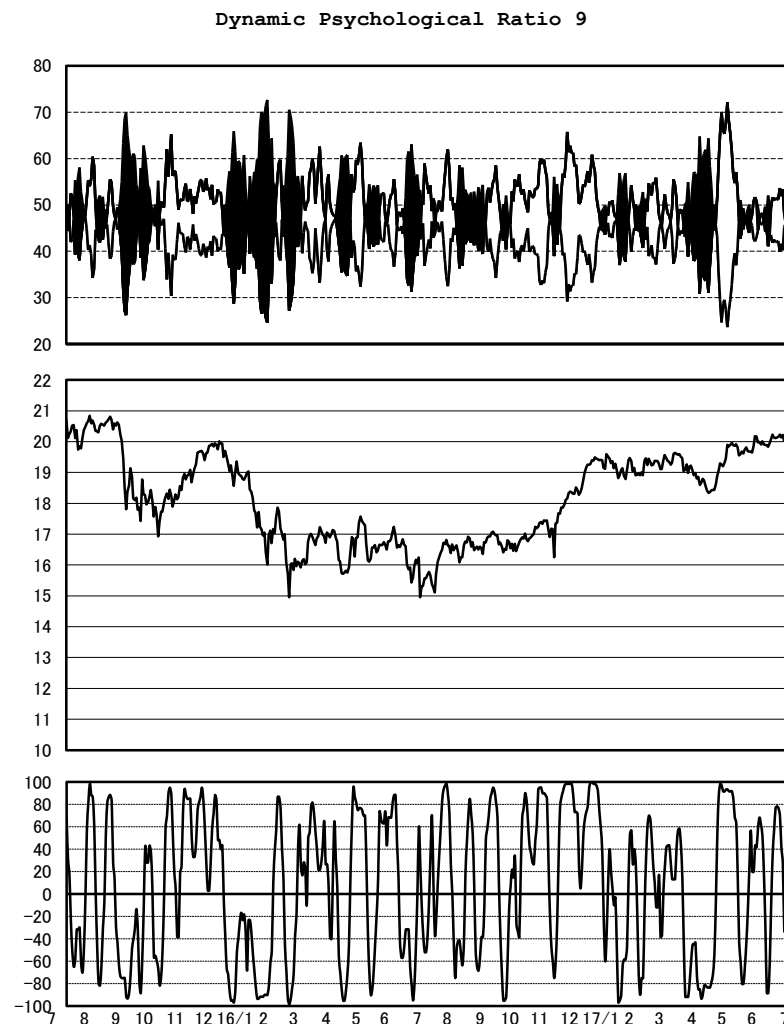
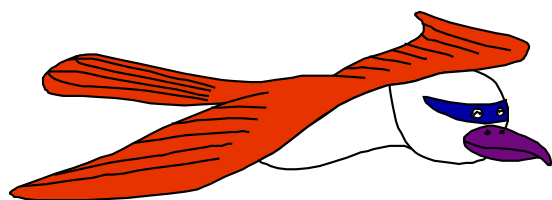
金融商品取引業者 北陸財務局長（金商）第3号

日本証券業協会加入

制作責任者： 営業業務部 調査課

情報シャトル特急便

第601号



上図は騰落銘柄数をベースとした独自のもので、黒の幅が拡大→買い場、白の幅が拡大→売り場
下図はRCI（9日ベース）で、 -80%ラインを上につき抜け→買い場
80%ラインを下につき抜け→売り場

大 所 高 所

F R B イエレン議長は 12 日の議会証言で、誰にも言質を取られないように、これまでと同じようなことを喋った。従って、13 日のマスコミ報道を読んでも、それがハト派的なものかタカ派的なものか判断に迷ったくらいだ。ところが、マーケットはこれを強引にハト派的なものと解釈して、急激なドル安→株式・債券が大幅高になった。

この動きについて、日経経済部の浜美佐記者は「単にイエレン議長の発言にかこつけて、短期筋がポジション調整を行っただけだ」という三井住友銀行佐藤慎介為替トレーディンググループ長の見解を伝えている。おそらくこの見方は正しい。直前の急激なドル高の巻き戻しが、株式や債券のアルゴリズムを刺激し、大きな上昇に繋がったのだ。決して大勢を変えるようなものではなく、想像以上に緩やかなテーパリングになると見る、これまでの路線上の動きだったのだ。

つまり、世界のマーケットは超過剰流動性に大きく依存し、その動向に神経質になってはいるが、まだ金余りは続かざるを得ないと踏んでいるのだ。だから基本は「上げ基調変わらず」。ただ、時に目先筋を振るい落として相場の腰を強くしているだけなのだ。そんな変動に翻弄されてはならない。超過剰流動性が暴発して、大きなインフレが起きるまで上昇相場は続くだろう。

(B I S)

た だ 一 筋

ドル円相場で4ヶ月ぶりとなる114円49銭を付けたことで、物色の流れがグロース株（中小型株中心）からバリュー株（大型輸出株中心）へと変わり、日経平均株価が21,000円台へ向かうとの期待があったが、相変わらずの狭いレンジ相場で、売買高も盛り上がらない状況が続いている。

この動きに対し、市場関係者からも下がらないから上がれないのだ、とか、膠着相場が長引いた後には下振れする傾向がある、等々の慎重な見方が増えてきている。また、主体別投資家動向でも、今期の1Q（4-6月）の決算発表（米国は今週から、日本は来週から本格化）が気がかりで、目立った買い方が不在だ。したがって、すべての人がヘッジファンドのように、買ってもすぐ売る短期売買に徹している状況なのである。

さて、このような状況下、中小型の個別物色の強さがより際立ち、物色も広がりはしているが、逃げ足の速い資金が多いだけに注意も必要だ。ここからは、突発的な材料で急騰する銘柄は避け、アナリストレポートなどを参考にして、しっかりとした成長銘柄を選定していくべき処だ。

個別株では島精機製作所（6222）、ハーモニック・ドライブ・システムズ（6324）、日本バルカー工業（7995）。これらの銘柄は高い技術力を武器に高成長が期待できる銘柄として注目している。

（三感王）

参 見 屋 当 たり

日経平均株価は2万円前後で膠着感が強まっている。ただ、予想PERは14.4倍と、世界の主要国の株価指数と比べて割安感がある状況が続いている。円安傾向にあることも追い風だ。こうしたなか、7月後半からは、4-6月決算の発表が本格化する。好調な業績が確認できれば、日経平均が動き出すきっかけになりそうだ。

個別銘柄では、ツバキ・ナカシマ(6464)に注目したい。精密鋼球が主力の会社で、身近なものではボールペン用ボールで圧倒的なシェアを持つ。米EVメーカーのテスラが量産モデルとして初めて発売するEVセダン「モデル3」では同社のセラミックボールが採用されている。セラミックボールは、これまで自動車に使われてきた鉄球に比べて重さを半分以下に減らすことができるうえ、硬度は倍以上もあり、熱に強く変形しにくい。これまでは高級車にしか使われていなかったもので、今後量産車に普及する可能性がある。

(笑春)

中 堅 の 視 座

半導体市況が良い。昨年から半導体ブームで、前期の関連各社の業績は上振れて着地している。新興国でのスマホ増加やIOTの普及などで今期も加速しそうだ。製品の値上げで収益拡大が見込まれるSUMCO(3436)、半導体シリコン事業が好調の信越化学工業(4063)の押し目は拾いたい。また、先週目立った動きをしたのがUTグループ(2146)だ。同社は製造業派遣に強みを持ち、今の半導体・電子部品の伸びで恩恵を受けており、働き方改革の関連銘柄としても注目を集めている。

そして福井人としてやはり気になるのが、19日上場のユニフォームネクスト(3566)だ。弊社福井支店の近くに本社を構え、仕事場で使用するための業務用ユニフォームを販売する事業を行っている。インターネット販売が主軸で、全体売上高に占める割合は9割超に上る。福井県の企業としては前田工織の上場以来約10年ぶりの新規上場で、投資家の注目度も高そうだ。公募価格は上限の2,800円で決まっている。過熱感がなければ初値買いも面白そうだ。

(7201)

きらきら星

人工知能（ＡＩ）による第４次産業革命が起こっている。最近の日経新聞での報道からも見られるように、ＡＩの活用は、コンビニや飲食品メーカーによるヒット商品模索を目的とした味覚ＡＩや、食品需要予測ＡＩ、話しかけると応対してくれるＡＩ家電、銀行によるＡＩを活用した顧客開拓、大手薬品会社による創薬ＡＩ、医療の現場においては、がんを判定するＡＩ等々、企業の技術革新において欠かせないだけでなく、我々の生活のあらゆる所での活用が目立ってきている。ウェザーニューズでは、テレビ局に送る気象予報ニュースの原稿について、これまで降水確率のみにおいてＡＩを活用していたが、気温や、大雨、暴風の警報・注意報、紫外線や洗濯の指数でも使っていく。また三菱電機はディープラーニングを使い不審者や社会的弱者を監視カメラでとらえるシステムを開発、東京五輪をにらんで実用化を進めている。

まだ三合目ぐらいといわれるＡＩ普及による産業革命は、各種企業の産業効率や利益率を将来に渡って大きく高めていくことになり、個々の企業株価の上昇、引いては日経平均の上昇を持続させる可能性が高いだろう。

（お産み）

アナログの俯瞰

それにしても長い膠着相場である。日経平均は2万円を挟んで一進一退。売買代金は2兆円割れもしばしば。この後の相場も、外国人目先売りと海外の地政学リスク、国内の政局、それに対して日銀や公的年金などの買いの綱引きが膠着を長引かせそうだ。大型株は押しで仕込み、4-6月期の決算発表を睨みながら今しばらく個別株物色で資産効率化を図り、いずれ来るであろう業績相場と、相反する金融相場の並行相場を予見して投資意欲を高めていこう。

数年前なら、やれミサイルだ、やれ政局だで暴落していたかもしれないが、企業業績回復が顕著であり、マイナス金利でもあることから狼狽売りは出にくく、余剰資金も豊富だ。大きな下振れ相場はないと見て運用比率も徐々に高めてみては。

ところで、相場膠着時に限ってよくテーマとなる株がある。ゲーム関連だ。アーケード、家庭用、スマホ。関連株は多いが、どの会社もゲーム人気再燃から業績回復している。特に家庭用ゲーム機の復活。シンボルストック任天堂株の息は長い。

1部で福井のセーレン(3569)とネット投稿監視・AI関連のイー・ガーディアン(6050)、それにスマホケースのHamee(3134)、マザーズで入札情報速報サービスのうるる(3979)。

(近年稀にみる洪水多発、川のほとりで戦々恐々クレイジーゲーマー)

アナリストによる北陸企業便り

(近藤浩之)

＜タカギセイコー＞

2018年3月期の営業利益（会社予想）は15%の減益。モデルチェンジに伴いパソコン筐体部品の生産コストが嵩み、新規分野の針無し注射器の生産準備でもコストが嵩む。加えて、海外での人員拡充と国内外での賃上げによって人件費が増加し、設備増強に伴う減価償却費の増加も重荷となる。

対して、利益押し上げ要因は、①中国での車両分野の受注増加、②構造改革の成果継続。今年1-6月の中国におけるSUV（スポーツ用多目的車）販売台数は前年同期比+18.3%、主要取引先であるホンダの1-5月の中国での自動車生産台数は同+22.0%と、好調を維持している。これを映し、今村証券では、今期営業利益は26億円（前期比±0%、会社計画比+18%）程度、EPSは80円程度と予想する。また、4期ぶりの復配を予想する。

差別化技術、新規分野でも成果が現れている。差別化技術では、樹脂とガラス繊維の複合材による車両構造部品の量産を開始し、ホンダが昨年3月に発売した新型燃料電池自動車「CLARITY FUEL CELL」のリアバンパービームに採用された。新規分野では、糖尿病治療薬のインスリンなどの投与に用いられる、海外向け針無し注射器の樹脂部品の量産を来年1月に開始する。

今期業績の上振れ期待を背景に、株価には上昇余地があるとみている。

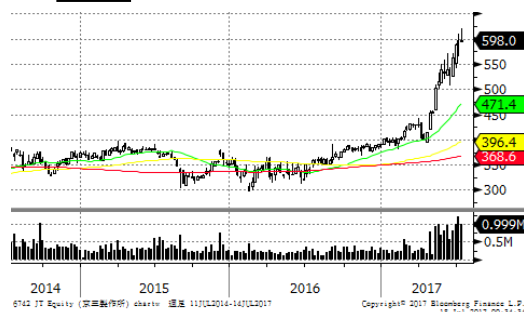
” 僧 中 線 罫 ”

6742 京三製作所

月足



週足



出所：ブルームバーグ

今週は国内外で大きなイベントを控える。まずは国内で、19～20日に日銀の金融政策決定会合があり、海外では20日にECB理事会が開催される。欧米では金融緩和の出口政策の模索が始まっており、ドラギ総裁が一步踏み込んだ発言をするか注目される。今週から米国では4-6月期の決算発表が相次ぎ、日本も今月下旬から4-6月期決算発表が本格化するため、業績に対する個別物色が展開されるだろう。

今回は、オリンピック関連として京三製作所に注目したい。信号大手の一角で、大手私鉄向けのホームドアの設置の拡大や、半導体製造装置用の電源装置が好調で業績も急回復。18/3期の会社予想では、売上高700億円（前期比16.7%増）、営業利益35億円（同125.6%増）、経常利益38億円（同94.4%増）、EPS41.45円（前期実績14.77円）としている。株価も20年ぶりに一時600円台に乗せた。相場はまだ始まったばかりでこれから楽しみな銘柄だ。

(I C H I)

* 情報シャトル特急便は、投資家の参考となる情報提供を目的としておりますが、投資にあたってはご自身の判断でなされるようお願いいたします。

株式の売買取引には、約定代金に対して最大 1.1799%（税込）（1.1799% に相当する金額が 2,565 円未満の場合は 2,565 円（税込））の委託手数料をご負担いただきます。株式は、株価の変動により損失が生じるおそれがあります。

非上場債券を当社が相手方となりお買い付けいただく場合は、購入対価のみお支払いいただきます。債券は、金利水準の変動などにより価格が上下し、損失を生じるおそれがあります。

投資信託にご投資いただくお客さまには、銘柄ごとに設定された販売手数料および信託報酬等の諸経費等をご負担いただきます。投資信託は、主に国内外の株式や公社債等の値動きのある証券を投資対象とし投資元本が保証されていないため、当該資産の市場における取引価格の変動や為替の変動等により投資 1 単位当りの価値が変動します。したがって、お客さまのご投資された金額を下回ることもあります。

外国株式・外国債券等は、為替相場の変動などにより損失が生じるおそれがあります。

商品ごとに手数料等及びリスクは異なりますので、その商品等の上場有価証券等書面、契約締結前交付書面やお客様向け資料をよくお読みください。